

国内外へ仙台の魅力を発信！ ―羽生結弦選手が第3期仙台観光アンバサダーに就任

平昌冬季五輪フィギュアスケート男子シングルで金メダルに輝き、66年ぶりの五輪2連覇という偉業を成し遂げた羽生結弦選手に、3期目の仙台観光アンバサダーを委嘱しました。今回の委嘱期間は、平成30年4月26日から平成32年4月25日までとなります。

羽生選手は平成26年4月から、仙台観光アンバサダーとして仙台の観光パンフレットやポスター等で本市の観光振興にご協力いただいています。

郡市長から委嘱状を受け取った羽生選手は、「今後も国内外に仙台の魅力を発信していきます」と意気込みを話していました。

先に4期目の観光アンバサダーを委嘱している福原愛さんと共に国内外へふるさと仙台をPRしていただき、誘客や交流人口の拡大を進めていきます。



▲市長から羽生選手に委嘱状を手渡しました



◀ふるさと仙台の魅力を笑顔で話す羽生選手

※写真の転載はできません

市政トピックス

定禅寺通市民フォーラムを開催しました

青葉まつりや定禅寺ストリートジャズフェスティバルなどの会場として、市民に親しまれている定禅寺通。この場所を活性化させることで、市中心部エリアの人の動きを広げるため、4月23日にせんだいメディアアテックで定禅寺通市民フォーラムを開催しました。

フォーラムでは、芝浦工業大学の鈴木俊治教授による基調講演のほか、定禅寺通にゆかりのあるゲストなどによる意見交換を実施。「地域・市民・行政がうまく連動することが肝心」「市民が憩い生活を豊かにできる場」などの意見があり、参加した約200人の市民と共に、これからの定禅寺通について考える一日となりました。

市政トピックス

東北電力とエネルギーマネジメントに関する協定を締結

市では、東日本大震災の経験を踏まえ、指定避難所等に防災対応型太陽光発電システムを導入しています。このシステムを平常時にも効率的に運用するため、東北電力株式会社の仮想発電所（バーチャルパワープラント）技術を利用

市政トピックス

1万人が新緑のまちは駆ける―「杜の都ハーフ」開催

5月13日に第28回仙台国際ハーフマラソン大会（杜の都ハーフ2018）が開催され、1万3228人の選手たちが新緑の杜の都を駆け抜けました。

今年は、国際姉妹・友好都市、交流促進協定締結都市からの招待選手のほか、2018年ポストンマラソンで日本人選手として31年ぶりに優勝した「公務員ランナー」の川内優輝選手や、リオデジ



▲協定書を共に掲げる市長と東北電力株式会社原田社長（左）

市政トピックス

商工会議所、産業振興事業団と事業承継支援協定を締結

仙台市内の中小企業がこれまで維持・拡大してきた雇用や技術・ノウハウを次世代に円滑に継承するため、4月10日に仙台商工会議所と公益財団法人仙台市産業振興事業団と市の三者で「事業承継支援に関する協定」を締結しました。

今後、事業承継に関する啓発活動や支援情報の提供、窓口での相談など、連携した事業承継支援に取り組みます。



▲新緑の定禅寺通を走るランナーたち

市政トピックス

消防航空隊新庁舎が開所しました

若林区荒浜にあった市消防航空隊のヘリポートが東日本大震災の津波で被災したため、宮城県と共同で岩沼市の仙台国際空港隣接地に新たな活動拠点の建設を進めてきました。このたび新庁舎が完成し、4月1日から業務を開始。4月27日には県と市の関係者を招いて開所式を行いました。

新庁舎は庁舎と格納庫からなる3階建て。敷地には県と共同のヘリコプター離着陸エリアが5カ所あり、災害時などに他都市の防災ヘリコプターを受け入れることができます。災害時等の速やかな離着陸のため、航空隊員は日々訓練に励んでおり、今後も市民の安全・安心のため力を尽くしていきます。



▲消防航空隊新庁舎開所式には防災ヘリコプター「けやき」も展示

3.11 震災文庫を 読む



木村朗子 / 著 青土社 刊



東北学院大学地域共生推進機構 / 編 荒蝦夷 刊

東日本大震災を語り継ぐため市民図書館に設けた「3・11震災文庫」。所蔵する約1万冊からよりの本を「紹介します」。

作家は震災をどう捉えたのか
株式会社プレスアート
編集部部長 川元 茂

「震災後文学論」

実行委員会として関わった第1回仙台短編文学賞（※）の選考・発表を終えました。全国から576編もの応募が集まり、約7割がなんらかの形で震災に触れた作品でした。「震災をテーマにするのは難しい」と選考委員の佐伯一麦さんが評していますが、7年が過ぎて、やっとな文学として表現できる時が経過したのだらうと感じています。

震災をテーマに小説を書く行為に対して、文壇に過剰な自主規制があったのではないかと指摘するのは、木村朗子さんの『震災後文学論』です。2013年に発行されたこの本は、震災を物語ることの難しさや小説に刻まれた断層などを通して、

「震災と文学 講義録」

一方、震災について苦悩しながらも表現から逃げなかった作家もいます。「震災と文学講義録」は、2013年から開催された東北学院大学の公開講座をまとめたもので、山折哲雄さん、赤坂憲雄さん、池澤夏樹さん、いとうせいこうさん、柳美里さん、熊谷達也さんら、第一線で活躍している作家・学者たちの真摯な肉声が収められています。彼らが震災後、何をみつめ、何を感じ、何を書いたのか、被災地の聴衆に直接語りかけた貴重な一冊です。

※東日本大震災被災地の作家の発掘・育成のため、平成29年に創設された文学賞

●紹介した本は、市民図書館でご覧いただけます 問市民図書館 ☎261・1585